

カウントダウン⑥続「三多」

企業経営漫談士 岡野実空

第2走へのバトンパスまで、残るは7回。今回のテーマは、かつて本編に書いた元&新「三多」を振り返る、続「三多」。コラム通算300号が近づいま、フランシス・ベーコンの名言、「読むことは人を豊かにし、話すことは人を機敏にし、書くことは人を確かにする」を改めて噛み締めます。

その1:「書く」ことは人を確かにする

続「三多」は、逆に「書く」から開始。かつてコラムを書き始め、まず直面したのは我が「知識」の曖昧さ。それでも何とか仕上げた下書きを、読者の立場で読み直してみると、内容がイメージできず、そのままではとても理解不能。そこからは、的確な表現に向けた「推敲」が果てしなく続きます。

また『ゼミナール経営学入門』を柱にしたため、全体構成や言葉の「定義」などで悩むことは少なかった一方で、毎回のように痛感したのは「記憶」の不確かさ。これまでセミナーなどで何度か話してきた内容も、念のため確認してみると間違いだらけ。イメージというものが、いかに「いい加減」であるかを思い知る日々は現在も続いています。

その2:「話す」ことは人を機敏にする

上記の「推敲」は、内なるもう一人の自分との「対話」ですが、それには自ずと限界があります。その独善を防ぐ有効な方法は、読者をイメージしながら、身近な他人にその原案を話してみる。その反応や質問から、自分では気づかなかった思い込みや間違い、矛盾、さらには相手がイメージ、理解しづらい部分に気づくことができます。

またその「対話」から、思わぬ副産物が生まれることもしばしばで、ときには文脈どころか結論まで変えることもありました。そのためには、こちらの状況をよく理解し、反応を率直かつ的確に伝えてくれる相手でないと意味がありません。それに関し、彼のカントが、毎日の「対話」相手だった無二の親友を失ってからすっかり精彩を失い、ひたすら同じ内容を繰り返すようになってしまったことほど、その重要性を示す事実はありません。さらにその逸話は、忌憚なく「対話」できる友人を複数持ち、自分を多面的に磨き続けることが、複雑化したいまの知識社会を生き抜く条件の一つであることを教えてくれています。

参照 『三々な経営』『続・三々な経営』

- 2-20 ミドル・マネジャーの役割
- 2-21 ミドル・マネジャーの意識と行動
- 3-4 企業人の「三多」
- E-8 墮落の要因①個人
- Z-16~20 私の推薦図書①~⑤

その3:「読む」ことは人を豊かにする

人生前半の読書は人間の幅を広げ、後半の読書がその深みを増す。その見本は、数万冊の書庫兼書齋「猫ビル」オーナーだった、知の巨人・故立花隆氏。その「読まない」と文章は書けないは、「読む」と「書く」の関係を的確に表す一言です。

それに加え、コラムを書きつつ痛感したのは、その変化球「書けば必ず読み直す」。自分の体験を除けば、「書く」の素は、これまで「読む」か「聞く」かして得たものばかり。実際、我が「猫の額」書齋にある関連図書や記録文書で、「書く」内容を確認する度に新たな発見があり、結局それらの大半を再読することになりました。

さて今回あえて「書く」からスタートしたのは、それが皆さんにとって「知の踊り場」であるため。すでに一定の知識と経験を蓄積しながら、組織というサイロの中で、多くのミドルがその貯蔵品を「形式知」にできず、結局腐敗させてしまうのです。

それを防ぐためには、まずサイロを出て外の風に当たること。次に外の視点で内部を見直し、価値ありと思しき「知識」を書いてみる。もっとも実業に身を置きながら、長文を書く余裕はないので、「備忘録」で十分。そしてそれをもとに周囲と「対話」し、内容の共有と改善に努めるのです。

そんなミドルを待っているのは、新たな知の「上り坂」。まずは、「隗」と「書く」より始めよ！

2022年11月28日 実空